対談

特集1

有明海の魅力について

佐賀県有明海漁業協同組合
代表理事組合長 **川﨑 守と荒牧 軍治**

ムツゴロウ網ですか。あまり知っている人はいないでしょう。〈荒牧〉

川﨑　昔は、戸ヶ里から早津江川に出て行くとホージャーという巻貝がたくさんいました。潮の満ち引きするところにはどこでも、ホージャーがいて、小学校の時から採りに行きました。沸くくらいいましたよ。堤防の上から潟に歩いて採りに行きます。

荒牧　鹿島の方は、とてもじゃないけど潟を歩いて行けない。川副の方はやっぱり潟に入ることができるのですか。

川﨑　全然、潟が違う。佐賀空港南の海岸は堤防の先はまだ泥ですが、筑後川の川端は砂が混ざっているから少ししかめり込まない。

ガニ漬けの真ガニ、これも、最近だいぶ増えてきた。真ガニを突いて塩と胡椒を入れて作る。独特な匂いがするが、昔はおかずがなかったから塩辛くても食べるしかなかった。酒にちょっと浸けて食べる。独特の食べ物です。蟹の殻を砕いているからカルシウムが体に良かったのでしょう。

ムツゴロウも川端にたくさんいました。ムツかけのように釣るのではなくて、昔は網で引いていた。

荒牧　船で引くのですか。手で引くのですか。

川﨑　小さい船を使います。小学生の頃父親について行きました。父親は船に乗り陸の上を私が歩いて、海と陸と両方から網を持って行きます。網は長さが10m幅が1.5m位です。

荒牧　ムツゴロウ網ですか。あまり知っている人はいないでしょう。

川﨑　ムツゴロウは潟の川端の所にいますが、川端を人が歩くと逃げようと思って飛び出て来る。網を水面からちょっと出るくらいにして引いていくと、ピョンピョンと跳ねて、たるんだ網に入ってくる。

荒牧　川端を組合長さんが歩いていたのですね。で、お父さんが船に乗って。

川﨑　下の方から先に行って、すくっていくように網をたるましておくと、ここに全部入ってくる。このムツゴロウは傷がついてないから釣ったのよりも高く売れた。

荒牧　ムツゴロウ、ホージャー、他に子どもの頃食べていたのは何ですか。

川﨑　他にはアゲマキが多かった。今の防から川端までどこにでもいたので、小学生の時よく採りに行きました。アゲマキがいるところには穴が二本あって、真ん中から足の所に水管があって、穴が広いのはアゲマキも大きい。30cm位もぐっているのを採っていました。

マテガイご存知ですか。今は塩をかけて上がって来るのを待ちますが、昔はずっと掘っていた。カタコンツと言っていた所が全部砂地で、運動場みたいに走ることができた。小学校の頃、漁師が交代で櫓をこいでマテガイを採りに行っていた。カタコンツまで、走っていったが、あんな遠くまで行ったなんて、考えてみれば心臓が強かった。

荒牧　固かったからカタコンツという名前ですか。

川﨑　そうです。昔はカタコンツからタカツまで全面的に固かった。マテガイは我々が小学校の時でも結構採れていた。「えっか」という意味分かりますか。えぐみがあるとも言いますが、マテガイの味は「えっか」ですけどアゲマキより旨い。比べ物にならない、アゲマキよりケタ違いに旨い。

荒牧　私が佐賀に来てから最初知った味がアゲマキです。魚屋さんで売っていたアゲマキを学生たちが買ってきてバーベキューみたいにしていた。あの時に初めて食べてとても美味しかった。それより旨いですか、食べてみたい。マテガイは全滅ですか。

川﨑　ちょっともう、有明海にはいないです。全滅状態でしょう。最近、聞いたことがない。

波寄せ

砂が減って何もかもいなくなった。シジミも少ししかいない。〈川崎〉

佐賀空港から先は全部アゲマキだった。

荒牧　アゲマキっていうのは、岸の近くだけで、遠くにいくといないのですか。

川﨑　いやアゲマキはどこでもいました。空港南の堤

荒牧　砂が無くなったせいですかね。

僕らの調査では、昭和30年代から50年代にかけて砂利採取で、ごっそり筑後川の砂を持って行ったのです。

川﨑　そう、砂が減って何もかもいなくなった。シジミも少ししかいない。筑後川は全部シジミだらけだったのに。

荒牧　この前、昔の写真集を見ていたら諸富の昇開橋のところも砂ですよね。あそこでもシジミが採れていたと聞い

夕陽舟

たが、今あの辺もみんな泥でしょう。
川﨑　そうみんな泥になった。6年生の頃、南川副の沖には川の真ん中に州があって、そこもシジミ床だった。同級生がその州に泳いで採りに行っていたが、塩分の多い下流のほうがシジミは大きかった。
最近、筑後川の本流で少し砂が戻ってきている。回復させるためには砂を入れればいいが金がかかりすぎる。
荒牧　砂を入れたお金を、シジミで取り戻そうという話にはならないでしょうね。観光とか別の目的で考えないと。
筑後川は全く変わりました。有明海の東側の方は筑後川から砂が下りてこなくなったのが一番の変化でしょう。城島の人もあそこは泥じゃなかった、砂だったと言っています。
川﨑　あと農業用水もあります。昔、大詫間は大野島の一番北に100馬力という揚水ポンプがあった。「わいの水」っていうかな、潮が満潮の時の2時間くらいしか取れなかった。
荒牧　アオ取水ですね。
川﨑　塩分が少しでもある水で米を作ると美味しくない。アオを取る時は、水をずっと見ています、舐めながら。これ以上やると塩分が上がるからだめというギリギリまで取っていた。南川副も大詫間も取っていました。南川副はカラマ、いわゆる小潮になって旱魃になると、「もうすぐアオが入ってくるぞ、だから田んぼは何とかなるぞ」と言っていました。アオの水は澄んでいて全然違うので、すぐ分かります。
アオの水はカラマにならないと入ってこないので何日間しか取れない。
荒牧　今はアオの水利権そのものがなくなったしまった。
川﨑　私が小学生の頃、南川副にだけ上水道があっって中川副・大詫間はなかった。時の県議会議長、原藤三郎さんが私財を投げ打って上水道を引いたと聞いている。
荒牧　南川副だけにですか。
川﨑　南川副だけに水道があったので、原さんたちの功績をたたえた水功碑が建っています。原さんが議長をしていた頃、アオの水を飲料水にも使っていたので、水道を引かないと衛生的に悪いし、伝染病も流行ると心配したのでしょう。犬井道のような田舎に上水道があるなんて。あれは今なら一大事業です。
荒牧　漁民の皆さんは、昔は農業をやっていたのですか。
川﨑　漁業と農業半々でした。漁業だけでは食べて行けない。海の近くに住む人が魚を獲るとか、おかずを獲るくらいの漁でした。
南川副の犬井道は、海に行けばたいていの物はあったから、何も持たなくても暮らしていけた。
荒牧　農地もいくらか持っていたのですか。昔は完全な自給自足だったのでは。
川﨑　ほぼ自給自足ですね。海岸がまだ近くにありました。自転車で行ってワラスボをかき、一つ先に行けばアゲマキがいました。ワラスボっていうのはアゲマキを食べるためにいます。
荒牧　アゲマキを食べていたのですか。あのエイリアンみたいな顔で。
川﨑　ワラスボが少なくなったのは、食うものがないからです。アゲマキとワラスボは一緒のところにいる。
荒牧　そうやって皆さんは自給自足で暮らしていたわけですね。
川﨑　昔はそうです。田んぼを持たない所は奥さん達が、陸に揚がって魚を売っていました。魚売りをシャーウイと言っていました。魚の事をシャーと言います。
「今日のおかずは何」は、方言で言うと「キューのシャーは何」と言います。シャーには、おかずと魚と両方の意味があります。
荒牧　ウイは売りですね。
いつ頃まで自給自足ですか。終戦前は間違いない。終戦後は昭和30年か40年頃までかな。でも漁師も農家も金を稼がなきゃテレビも買えない。その収入源は農産物が多かったのですか。
川﨑　ノリが出るまでは、そうですね。

アゲマキを食べていたのですか。あのエイリアンみたいな顔で。〈荒牧〉

ワラスボ

荒牧　組合長の家は、カキの養殖はした事はないですか。
川﨑　うちの親父はカキ養殖で失敗ばかりしていた。台風が来ると全部牡カキが飛んでしまう。3年に1回は儲かるが、たんぼを売らないと食べていけない。
カキ養殖は漁業権が難しく、普通の漁をやっている者じゃお金を払いきれない。力がある者じゃないと出来なかった。カキは台風でもう全滅です。それと赤潮でもやられた。
荒牧　赤潮でやられるのですか。何の赤潮だろ。
川﨑　わかりませんね。
終戦後まで父親はカキをやっていました。飯塚からの商売人がトラックで殻ごとカキを持って行きました。炭鉱地帯は景気が良かったし、終戦後は何もなかったから高く売れました。一方アサリは安すぎた。あまりに獲れ過ぎるので誰も食べる人がいなかった。
荒牧　獲れ過ぎですか。昔の写真を見たらアサリの山がどっさりありますね。

竹崎沖からの有明海

川崎　私の叔父たちは、多い時には、５０人くらい雇い、アサリをむき身にして干していた。日本人は食べていなかったから、おそらく中国とかに全部出していたと思う。

荒牧　養殖などではなく自然のものでしょ。何年ごろの話ですか。

川崎　終戦後の23年くらいかな。昔はたくさんいたので、誰が行っても桁違いに採れた。一人で２石（１石は100升）くらい採っていた。

荒牧　アサリは山のようにあるけど、それを食べなくてもよいくらい、食い物はあったのでしょうね。食い物には問題なかった。

川崎　戦後、兵隊から帰ってきて仕事が全然ない。海しかない。農業は24年に農地開放しそれから良くなった。それまでは地主に半分取られていたからだめだった。

荒牧　米を作り始めて佐賀段階などが始まる。皆さんがお金を稼ぐのは海の方じゃなくて農業が主だったのですね。

川崎　終戦後は米が高かった。１俵６千円、あの当時の６千円だから、いかに高かったか。その頃は米が一番良かった。

あのころは親父に言っても小遣いがもらえなかったから、土橋の傍にあった江里口という店で、家の米２升位を時々小遣いに変えていた。母親に気づかれないようにと、枡の位置を覚えていて米をすくった後、正確に元のとおりにしていた。でも母親は気づいていたかもしれない。

荒牧　結局、漁業は最後までお金を稼ぐという感じではなかったということですね。本当にお金が動き始めたのは終戦後の何から始まったのですか。やっぱり炭鉱に売ったカキくらいからですか。

川崎　南川副は半農半漁だったが、早津江・広江・諸富などは漁師専門だったから大変だった。それで養殖が始まった。アサリ養殖が流行ってきた。それと赤貝、今でいうサルボウですね。「天然物でやっていけないから養殖する」といって23年頃早津江の人が始めた。

荒牧　昭和23年頃ですか。では本当にお金になるものが何もないわけですね。

川崎　「養殖しないと食えないぞ」という事で始めた。また、昔は諸富とか広江は朝鮮アンコウに行っていた。韓国まで行って凄かったらしい。向こうは獲る技術がないから大量に獲って、船ごと叩き売って豪勢に遊んできたとかいう話を聞いた。広江が一番で諸富も行っていたはずだ。

荒牧　実際にこの有明海で本格的に儲かるようになったのはやっぱり海苔ですか。

川崎　海苔ですね。生活環境が全部変わったのが海苔です。海苔は少しばかりで高い金になった。最初は網じゃなく笹に付けていて、「あれが海苔だ、女竹だ」と言っていた。熊本が早かったので熊本の大浜滑石っていう所で自然に付いているのを持って来ていた。その後に福岡が続いた。

親父の部下が「隊長、海苔がいいからやりましょうよ」と、道具を全部持ってきて一番に始めた。値段は高いがやり方が分からない。そこで、早くから始めていた熊本の人たちを高い金で雇って始めた。

荒牧　本格的に佐賀で始まったのが昭和26、7年頃ですか。

川崎　もうちょっと後、30年頃でしょう。まず大浜滑石で天然の種を付けたが、これは青海苔ばっかりで話にならない。佐賀に持ってきた時点では、種は小さすぎて見えないのだから、当たり外れがあって、殆ど儲けはない。

荒牧　ホウキの先みたいなのを置いていて、そこに勝手に付いたのを持って帰ってくるのでしょう。黒い海苔が出来るっていうのは場所によるのですか。

川崎　福岡と佐賀がノリをするようになって、熊本の人たちが種の付いたのを売る商売をするようになった。材料はこちらから持って行くが、なかなかうまくいかず損ばかりしていたが補償はない。

でもこちらは赤貝がむやみに多かったので、養殖で失敗しても赤貝で取り戻せていた。海苔は、値段は高かったが青ノリが付くから儲けにならない。その後に流行ったのが人工採苗です。

荒牧　いよいよ人工採苗ですね。

川崎　熊本の宇土市住吉町のアンドリューさんの銅像がある所で、人工で種を付けていた。培養は熊本が早いのでそれを持ってきていたが「人工で種が付くわけが無いだろ」と半信半疑だった。ところが、うちの親父たちが持ってきたところ全く青がなく黒ばかりです。これが３３年。人工で付くという事で、佐賀でも水産試験場の山口さんともう一人が始めた。シーズンが終わると牡蠣殻の中に人工でノリの種を付けて夏を乗り切る。カキ殻の調達から種付けまで全部個人でやっていた。海苔には表裏があることも知らないくらいデタラメだったが、それでもいいお金になった。乾燥機がなかったので昔は田んぼの中に干していたが、あの時代一枚10円だったから10円札が干してあると言っていた。

生活環境が全部変わったのが海苔です。海苔は少しばかりで高い金になった。〈川崎〉

荒牧　そうか、10円はお札だったですよね

川崎　そうです。「あそこの田んぼには10円札が干してある」とね。

荒牧　それはまだ、お父さんと何人かしか、やってなかったでしょ。

川崎　十数人でしょう。本格的に始まったのは４０年過ぎてからくらいです。そのころに漁業会が漁業協同組合になったが資金がなかった。漁協の運営を軌道に乗せるため、海苔が良かったから人をたくさん入れた。「こんなに儲かるのをやらなきゃ馬鹿らしい」と皆入ってきたが、今みたいに手数料を取らなかったので漁協の運営が成り立たなかった。

荒牧　そのようにして、海苔で暮らしが立つようになったのですね。

川崎　最初は100戸くらいでだんだん増えてきた。南川副だけで一番増えた時で400戸くらいあった。

荒牧　米づくりはあまりやらなくなったのですか。

川﨑　米づくりもしていた。
米はあまり手間が要らない。米の忙しいのは田植えと稲刈りくらいで後はたいしたことはない。
荒牧　ほとんどの人は現金収入が農業だった。その人たちが海苔を作り始めたが、基本は同じ栽培だから考え方はあまり変わらないですよね。
一方福岡のほうは、昔の漁師さんたちがたくさんいたけど、他から移り住んだ人たちがノリ養殖をやって、元々の漁師さんたちは栽培するのが辛いし、養殖が上手くいかなくて辞めていった人が多かったと聞きましたが。
川﨑　漁師の人たちが減っていったのは漁師専門にやっていたからで、これがなかなか難しい。漁師の収入だけでは大変だった。米が高かったから、百姓には力がある。田んぼが一反500万円していた。
荒牧　そうか、資金ですね。
川﨑　漁師には、資金を銀行が貸してくれなかったし、当時、漁協に信用事業はなかった。漁業から入ってきた人たちは大変だ。ノリ網を買うにしても何を買うにしても資金が必要だが、銀行は資産がなかったら絶対に貸さない。
ノリ養殖を始める人は農地を売るか何かしてお金を作らなければならない。規模の小さな漁業者は田んぼを５、６反持っていたが、資金作りのために全部売ってしまった。
海の中は獲れない時は全く獲れないから、銀行にしてみれば漁業はあてに出来ない。でも、農協に行けば一反で２００万くらいは貸していた。
荒牧　確かに銀行は農家にはお金を貸すけど、漁業者には貸さないと言ってましたね。やっぱり信用度が低いのでしょうね。
ところで、どんどんノリ養殖が広がってくるとカキ礁を壊したりして、漁場を広げていかなければいけなかったじゃないですか。
川﨑　カキ礁は高低差が２ｍくらいあった。ノリ養殖をする場合、昔は技術方法が確立されてないから、ほとんど海に入ってからやっていた。潮が減ってからするので、深いところがあったりするとやりにくいから平らにしようという事でやったけど、それから海苔がちょっと悪くなってきた。結局平らな所は浮泥ばっかり溜まって話にならない。高低の流れがあって、この谷間に微生物が発生する。
荒牧　そしたら貝もいるし、魚もいる。
川﨑　これは失敗だったと今になって思っている。海苔があんまり良くなってきたから、海苔をしないとバカみたいに言われたが、今だったらカキ礁を壊したりしない。昔は潟を歩く時歩きにくかったが、今はほとんど船の上から仕事をするので問題ない。
荒牧　今、少し復元していないですか。
川﨑　みんなはそう言うけど、一回壊れたものは思うようにはいかない。
荒牧　久保田のはまだ生きている。西海区水産研究所の人たちが行って調べたら西は生きているけど東はいないといっていた。
川﨑　こっちには真ガキがあるからやったらどうですかと提案した。今年のカキ養殖は最高に良かった。
荒牧　良い悪いの原因は何ですか。
川﨑　去年の場合は赤潮で悪くなった。今年も少し赤くなったが被害を受けるまではなかった。シャトネラが一番であれが出たら一発でダメになる。他のはそれほどでもないが、シャトネラはひどい。

カキ礁

荒牧　僕ら佐賀大学の有明海研究のターゲットはシャトネラなどの赤潮と貧酸素水塊に絞っています。
川﨑　シャトネラはたまらない。スケルトネマとかならたいしたことはない。
荒牧　私には夢があります。自分は土木屋だから、久保田か芦刈で生きたカキ礁に橋を架け、歩いていけるようにしたい。普通は船に乗って行きますが、１キロくらいの木橋を架け、そこで潮の音を聞き、カキ礁に下りて生き物が観察できるようにしたい。そうすれば、有明海を手軽に肌で感じることができる。私は死ぬまでにこれを実現したい。応援をお願いします。
一番問題があるのは漁民のみなさんと漁業の問題で折り合いがついているかということなので、是非、ご協力をお願いしたい。
川﨑　それはいい、観光スポットになる。カキ礁があればその上を歩くことが出来る、
荒牧　嘉瀬川は水があまり流れていないから、やっぱり筑後川か六角川あたりでもいい。カキ礁は潮が引くといろんな生き物がいるので、子供たちの観察場所にする。川副のほうは歩けるらしいが、久保田とか西のほうに行くと泥だらけでとても人が入れるような場所じゃない。せいぜい歩けるのはカキ礁の所くらいだ。
今、観光を国交省がやっているが国交省はまだ金をもっているから、国交省とやりたい。ただ、国交省は漁民の皆さんとの交渉が苦手だからよろしくお願いしたい。いつか企画書を作って持ってきます。

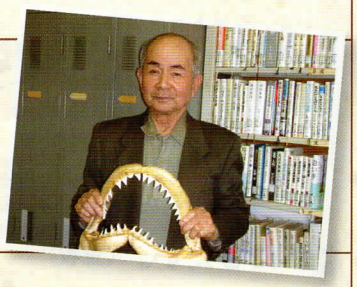
生きたカキ礁に橋を架け、歩いていけるようにしたい。〈荒牧〉

特集2 有明海昔がたり

有明海の旧き良き姿、光景を記憶に留めている五人の懐かしい想いで

朝鮮海域の遠洋漁業

石丸　幸男さん
（83歳）佐賀市西与賀



私が朝鮮海域の遠洋漁業に行ったのは、昭和16年16歳のときです。

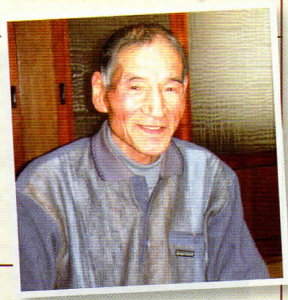
佐賀市の相応（そうおう）の港から北朝鮮の鴨緑江までの出漁でした。漁期は台風の時期をずらした4月から6月の約3ヶ月間。大正時代から私たちの先祖が、朝鮮西海岸の魚の宝庫を目指し、身体と知恵をかけて活躍しました。

私は、朝鮮行き船「幸福丸」の長男でした。父は、大正十何年かの台風で、朝鮮沖で船を大破、それ以来休業していました。相応の港からは、若吉丸、龍福丸、龍王丸、龍金丸、秀吉丸等の十数隻と、川副町の広江から数隻、全部で二十隻余りが島原沖で合流し、有明海を後にして、朝鮮海域に向かったのです。

相応下の「八大龍王神社」の前から船団を組み、佐賀県の水産課の方々や地元の見送りの人たちの万歳の声に送られて、十五トン級の木造船に乗り込みました。現在のノリ船が五トン級なので、三倍の大きさで見事な船でした。当時の船には、焼玉(やきだま)と言う15、6馬力のエンジンを据え、帆は天竺木綿で作ったものでした。漁具は、バッシャという大きな樫の木の錨のついた網です。獲物は、主にグチ。朝鮮ではグチを日本の鯛のように好みます。生野菜は船に積めないので、大根を千切りにして、乾燥したものを持って行き、それを船の中で水で戻して料理します。相応の港から島原へ行って、一泊します。そこで、佐世保鎮守府へ通行許可書を船主は貰います。軍港を通るので、高い所から望遠鏡で見ている兵隊さんに、船上から通行許可書を見せ、旗の合図で、そこを離れ、流れの速い「早崎の瀬戸」から野母崎(長崎県)へ。ここで一泊。この島の観光名物の「井戸の大ウナギ」を見てから平戸に一泊。神社参拝。天気がいい日は、天竺木綿の帆を張って，済州島へ行って何時間か休憩。木浦(もっぽ)で、一泊。ここで現地の人を5、6人雇います。日本からは、船長を含めて3人乗りでした。この木浦の岸壁には、日本からの船の乗組員になろうと思っている人たちが数多く待っています。現地の乗組員と木浦で一週間ぐらいグチの漁です。船のエンジンを止めて，船底に耳を当てて，グチの鳴き声を聞き「グー、グー、グー」の声がすると網を降ろして漁をします。そしてそのグチを積んで港に戻ります。港には、大きな竹かごを背負った荷揚人が大勢待っています。氷の無い時代だから船の下の魚は腐っています。だいたいの荷揚げが終わる頃、朝鮮飴売りのおじさんが来て、船底の残り魚と飴を交換をします。

時化（しけ）の日は、漁を休み、潮の満ち引きに合わせて、郡山へ「マッカリ」を飲みに行きます。木浦で、一週間ぐらい漁をし、その後、エンペン港へ。そして仁川から鴨緑江、さらに龍がんぽ。ここが終点です。その頃になると、季節は6月になっています。ここで船を売ってしまいます。建造した時の値段よりも高く売れることもあるそうです。たぶん船が足らなかったからでしょう。船主は大金を抱えて、陸路や船を使って日本へ。当時の金額で、六千円から八千円。それ以上だったかも知れません。私は三か月で五十円と良い給料でした。戦雲急を告げ、朝鮮への遠洋漁業は昭和16年で終わりました。私にとって、最初で最後の出漁となりました。

父から子へ、いずれは孫へと



吉田 静夫さん
（76歳）佐賀市東与賀

昭和6年9月の生まれです。今、76歳ですが15歳の時から海に出ていました。親父も、じいさんも漁師だったので、小さい頃からその手伝いをしていました。海が大好きです。男3人、女3人の兄姉の末っ子で、父に大変可愛がられました。親父はいつ、どこで死ぬかわからん、顔も分からんごとなると、自分の名前を右腕に入れ墨をしていました。
小さい頃から、父に海のことをいろいろ教わりましたよ。

「船が沈んだ時は、船から離れるな」「常に、短いロープでもいいから持っておけ。五寸のロープでも粗末にするな。身体をくくりつけるために役に立つ」と言ってました。

その父が50歳で亡くなりました。私が4年生の時でした。兄が後を継いだのですが、戦争で兵隊に行っていた間は、我が家は漁はやめていました。

戦争が終わり、兄が帰ってきたので、また漁を始めました。私も中学校を辞めて働きました。回りにはそういう人はたくさんいました。当時、15歳はもう一人前の働き手でした。兄と一緒に漁をしていましたが、戦後は油が不足していたので木炭をたいていました。木炭から出る一酸化炭素のガス中毒で亡くなった人もいました。最初は袋網で白石の六角川の近くで、えび、クチゾコを取っていましたが、クチゾコはよう取れよったですね。川副の船津付近に魚を卸していました。袋網は1年くらいで、後は高羽瀬でした。近所の人も高羽瀬で魚を取っていましたが、最近では皆辞めてしまい、今でも続けているのはこの付近では我が家だけですね。
兄が船に乗らない日もあったので、そういう時は私が船上では責任者でした。

人も雇っていましたが、その人達は私よりも年上でした。でも、船では責任者の言いつけは絶対だったので、年下だからという苦労はありませんでした。

船上では船長が食事に手をつけないと、誰も手を出すことなどできなかったので、今でも当時雇われていた人が家に来ても、夕食時に私がいないと「親父さんが帰ってきてないから」と食事に手をつけません。妻達は「いいから、いいから」と言うのですが食べません。そこで、海の神さんに上げるように、私の茶碗にちょっとご飯をつぐと、ようやく食べ始めます。

25歳で結婚をしました。妻は20歳で家に来てから成人を迎えましたが、今のように晴れ着を着て成人式に出るということなどなく、海で仕事をしていました。昔は、出船の時に女性が横切ったら、もう一度、出直すというくらいでしたが、私達の頃はそういうことはありませんでした。女性も船に乗って働いていました。今のようにGPSなど船についてないので、船を繰るのは勘でした。兄貴は一人前にしようと、早ようから私に舵を握らせていました。おじは、暗い夜でも、竿の感触や潮の流れで、どこにいるかわかるようでした。寝るとどこにいるかわからなくなるので、寝ずに夜通し起きていて、休みをとることはありませんでした。凄いなあといつも思っていました。少しでもこのおじに近づきたいと一生懸命働きました。

吉田多枝子さん

エビやいかごは良く獲れました。獲れたエビなどは、大財にあった市場の丸魚に卸していました。昼夜に漁をしていましたが、昼は木の4斗樽に6個くらい獲れると、家内が車で運んで市場に軽トラックで運び、私は海上で夜の漁の準備をしていました。夜獲った魚を一ぱい積んで、朝の陽を浴びながら帰っていくのは、とてもいい気持ちでした。

魚やエビや貝が取れなくなったのは、農薬のホリドールが使われ始めてからですね。それまでも、5年周期で漁獲高の上下がありましたが、働いても働いても全く取れなくなりました。それに水俣病の風評被害にあい、有明もんの売り上げが三分の一に落ちました。

それで、漁ができない冬は干拓の作業に従事しました。仕事は好きだったので、つらいと思ったことはありませんでしたが、妻は不慣れなので、他の夫婦のようにはいきませんでした。しかし、その当時はお互い助け合っていましたね。携帯もないので、事故が起きた時は仲間の助けが一番なのでね。

朝陽漁

漁で海に出ると1週間も家に帰らず海で生活をしていました。船に耐火土で小さな「へっついさん」、竈ですね、をつくり、それで煮炊きをします。ご飯を炊くのは私の方が上手ですよ。荒神さんも祀ってましたね。ご飯が炊き上がると、海の神さんにお供えをしていました。また、私は付き合いのあった柳川の豆腐屋にもらい風呂をしていましたが、妻はそんなことはできず、積んできた水で身体を拭くくらいでした。大変やったろうと思います。妻は力も違うし、それまで海のことなどしてきてない人だから、船の上でも自分でできることは自分でやって、あまり仕事をさせんごとしていました。

海が変わったのは筑後川大堰や北山ダムができてからで、潮の流れが西から来ていたのが東に変わった。昔は秋のグチはまんまるに肥えていたのに、今は栄養分の少ないのか肥えてない。まながつおもクーラーに5つほど取れていたのに。今年は甲イカも少ない。

現在は、娘夫婦の代に変わりました。人生を振り返ってみると自分で決めたことだから悔いは残らんね。お金も残らんやったけどね。（笑い）でも、娘夫婦があとを継いでくれ、その子どもの孫も海で働きだしたので、親父から自分、娘夫婦、孫と海の仕事が続いているのは大変嬉しいことですね。

かつての塩田宿(港)の賑わい

杉光 和雄さん
（84歳）嬉野市塩田町

塩田杉光商店跡

私の店は、かつて大いに賑わった塩田宿(港)の杉光陶器店です。今も続いています。私が幼い頃から昭和10年代頃の話をします。祖父、父、古老からの話も混じるので聞き違いもあるかも知れません。ご承知ください。

店は、塩田川の川沿いに建っていたので、船による天草からの陶石、石炭、砂糖等の運び込みや陶磁器の搬出で、とても繁盛しました。有明海の潮が満ちるまでの船出の時間調整のために、船主や船乗りたちは、私の店で風呂に入ったり、将棋をして遊んでいました。当時の船は、帆船です。満潮の潮から引き潮に乗って、塩田川を下り、有明海に入ると帆を揚げて快走したそうです。有明海と有明海に流入する河川を利用する船の帆は、船体の大きさに比べて小さくつくっています。帆を大きくすると強い川風で転覆するおそれがあるからです。

塩田杉光商店

塩田の町でつくっていた珍しい磁器を紹介しましょう。それは携帯用の尿瓶(シビン)、火鉢、三段重です。「携帯用の尿瓶」は、主に今の北朝鮮に運んでいました。冬の北朝鮮はとても寒いので、屋外の便所に行くのがつらくて、携帯用の小便器が重宝されたようです。大人用は、直径6寸から8寸(約19ｃｍ～26ｃｍ)の丸い鉢です。女性用の口は広く、男子用は小さくつくられていました。子供用は6寸でした。暖をとる火鉢(七寸火入)は、内径が約21ｃｍの円筒で高さが約21ｃｍでした。三段重とは、大阪の工場で働く女工さんたちの三段重ねの弁当のことです。直径が約7cm、高さが約20cmの可愛いデザインの焼き物で、下段はご飯、中段はおかず、上段は御香香（おこうこう）だったようです。御香香とは、大根の漬物のことです。しかし、アルミの弁当ができてからは、まったく売れなくなりました。磁器は重くて、割れるのが致命的でした。これらの焼き物は、巨大な登り窯で焼きました。火鉢の中に、尿瓶を入れるなど、合理的に多く焼いて、コストダウンをしました。

それらを焼くための大量の松材は、天草から運んできました。砂糖、昆布、陶石、八幡製鉄所で作られた多くの鉄材は、農業用具、馬車の車輪の鉄枠、蹄鉄(馬の足裏を保護する鉄)用など、ありとあらゆる生活用品や産業資材が塩田の港に上陸したのです。それらを県内各地に運ぶために馬を使った運送業も盛んでした。現代は、車社会ですが、当時の人と物の輸送手段は、船でした。港町が栄えた理由です。とにかく、塩田宿の周辺は、県内でも一、二位を争う人口の多い地域でした。嬉野温泉へ行く湯治客も多かったものです。今、昔の賑わいはありませんが、かつての古い建物群が残っています。伝統的な建物を残し、復元を進めています。再び塩田の町が活性化することが念願です。

イカダくだり

原口　尚さん
(80歳) 佐賀市蓮池町

夜明けダムができる昭和29年前までは、筑後川を利用して、日田からイカダで木材(日田杉)が運ばれていました。

四メートルぐらいに木材を裁断し四連ぐらいつないで一つのイカダにして運んでいました。それにイカダ師が一人乗っていました。そのイカダに若いころ乗せてもらったことがあります。

現在の夜明ダム付近の瀬など、いくつか難所がありました。そこでは、一つのイカダごとにイカダ師が乗り、細心の注意を払って下り、穏やかな流れになると後はイカダを四つくらいつなぎ下流の若津(大川市)へと運んでいきました。難所では危ないので、当然我々は下ろされました。降ろされた船かなんかに乗りかえたのでしょうか。

風景が刻々と変わり、遊び心でイカダに乗って下る雰囲気は最高でした。

イカダの幅は3m。縄ではなく、全部カズラで若い衆が結んでいました。ワイヤーだと木が傷むのでカズラで結んでいました。

イカダ師は花形でした。木こりよりよっぽど金になったようで、近寄りがたい存在でした。イカダ流しは誰でもできない。水の流れを読むとか、技術と経験がいりました。

イカダ師はほとんど日田の人で木材関係に従事する人たちの中ではエリートでした。

イカダ師は、日田から竹ざおを何本か載せていました。その竹ざおが大川付近では金になったのですね。選びに選んだ立派な竹なので、竹一本で遊郭で遊べるぐらいでした。

その頃すでに運搬船が筑後川に来ていたので、イカダ師はちゃんとよけていました。それは見事でした。大川から佐賀の方にもイカダが行ってましたね。

若津の浮き桟橋で大川の材木を下ろし、有明海の満潮に併せ逆流に乗せて、城原川、佐賀江を上って行きました。その時が水との戦争で、間違ったら本流の方に行ってしまう。本流と支流では水の流れが違う。まさに、水との戦いなのですね。どうしても大きい方に水は行きますから。佐賀江に行こうと思った出鼻で三角州に当たったとします。すると動けなくなりますから、今度は後ろにつないでいたイカダの尻がガタガタになる。まさに分流点においては、イカダ師は自然との喧嘩で、腕の見せ所となるわけです。

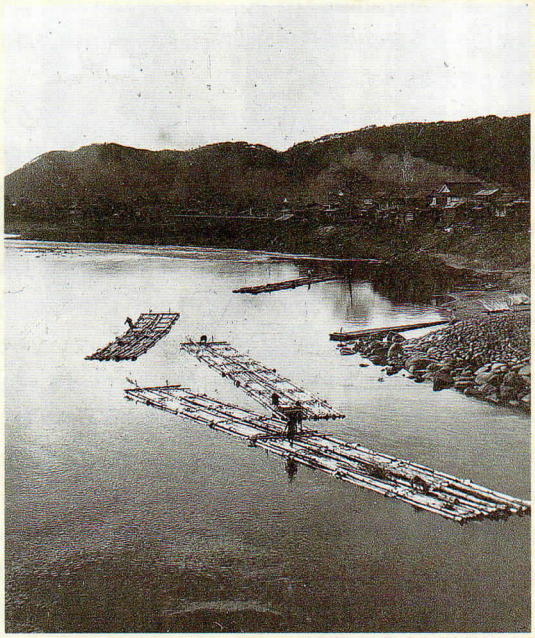
最終的には、佐賀市の材木町・上滝建設付近まで持っていきました。昔は、そのあたりは材木がいっぱい浮かんでいました。

佐賀市の材木橋に製材所があって、日田の木材が建築材として使われていました。当時ほとんど日田材を利用し、あけぼの橋付近に木材がつながれ、川面が見えないくらいでした。沼地(佐賀江の潟)で、行き倒れた人たちやヤクザの出入りで殺された人を埋めていたと聞きます。だからこの辺を工事すると結構人骨が出てきたといいます。嫌でした。中学生の頃はあの辺は家がほとんどなくて、夜になると火の玉が出ていたということで怖かった。

潮干狩りにいくときは、松原神社の北側の呉服町付近が潮干狩りにいく乗り場でした。芦町付近に芸者がいましたから乗せて下っていました。

江上橋というところありますね。大字江上ですね。この辺にお蔵というのがあった六百坪の平地に倉庫を作って、そこにお稲荷さんを作っていました。それはおそらく佐賀藩のお蔵ですから、米とか揚げていたのでしょうね。

昔は、佐賀市も筑後川とつながっていました。当時は川幅がありました。城原川は新橋付近まで、佐賀江川も川幅がありました。潟も今のように溜まっていなかったので、舟運（ふなうん）に利用できたのでしょう。今では、潟が溜まり、蒲田津水門ができて様相が変わりました。潮の影響での水害も減りましたし、筑後川とのつながりがなくなりました。筑後川との関わりが深い私としては寂しい気がしています。



「筏」杷木昭和橋（下流昭和初期）

諫早への渡海場の本庄津
(海の長崎街道)

松尾　金次さん
(84歳) 佐賀市道祖元町

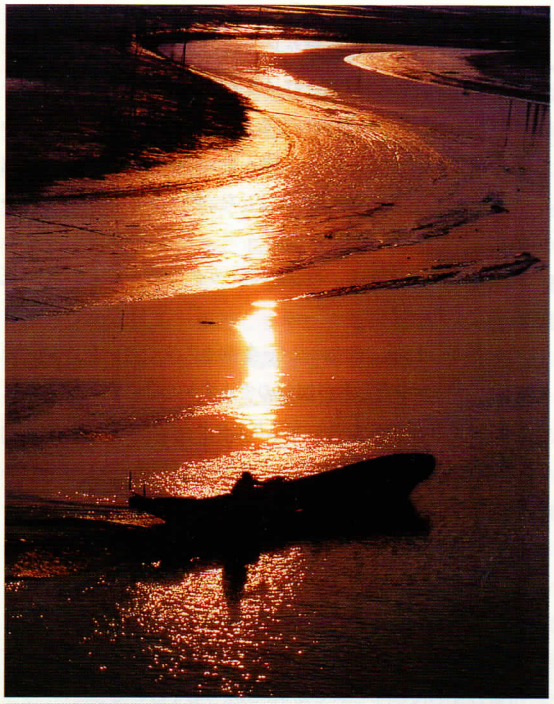
佐賀城下町を東西に走る長崎街道の袖町に諫早渡海場の石の道標があります。これは、諫早の本明川・光江へ向かう本庄津(早速立)の場所を示しています。つまり、佐賀城下から諫早城下への「海の長崎街道」です。満潮から干潮を利用します。船は、三反船(さんたんふね)、四反船(よんたんふね)、五反船(ごたんふね)があり、早く行く船としては丸木船もあったようです。三反船(さんたんふね)とは、三反の布を張った和船（船長は、約10メートル前後）のことです。外海の帆船と比べるとその帆は小さいものです。有明海を利用する川船としては、帆を大きくすると川風で転覆するそうです。長年の経験から帆の大きさが決まったのでしょう。丸木船は、楠木をくりぬいて造ったようです。

佐賀藩の伊東次兵衛の日記(佐賀県近世資料)によると、佐賀の本庄津から諫早の光江までの船の運航時間は、だいたい8時間から15時間だったようです。風向き、雨風、潮の速さなどで、運航時間は、7時間の違いがあったようです。ちなみに、大隈重信の回顧談によると、佐賀城下から長崎までは、一昼夜(24時間)の道のりだったと言っていますので、諫早の光江から長崎の佐賀屋敷の陸路(日見峠経由)は、9時間程度と考えられます。

諫早の光江と佐賀の本庄津の有明海を渡った著名な人物としては、福沢諭吉、河井継之助がいます。福沢諭吉は、「学問のすすめ」を著した人です。福沢諭吉は、長崎に遊学した帰りに諫早の光江から佐賀に向かいました。それは、彼の「福翁自伝」に記されているようです。河井継之助は、長岡藩の家老になった人で、32才の頃（安政6年）に佐賀藩の多布施反射炉(この頃、多布施反射炉は廃止になっていたらしい)や品川台場に運ぶ大砲を見たと日記に残しています。そして、佐賀から諫早に向かったのです。優れた才能の河井継之助は、出世して、長岡藩の家老になるのですが、戊辰戦争で亡くなります。

長崎街道の陸路を歩いた佐賀藩主・鍋島直正の記録によれば、佐賀から長崎までは、ほぼ4日かかったと記されています。海の長崎街道は、上述したように、約1日で、長崎と佐賀を行き来することができたのです。大幅な時間の節約です。

長崎の諫早に向かう場合、本庄津だけでは、ありません。潮の高低によって、本庄津の下流の厘外津、今津、相応津、丸目なども利用しています。江藤新平が佐賀の乱で敗れて西郷隆盛の薩摩に向かったところは、丸目です。本庄江の相応津付近には、佐賀藩の蒸気船・日進丸や電流丸が寄港しています。それらは、有明海に向かって頻繁に大砲の訓練をしていたので、その周辺の住民は、爆音に悩まされたようです。また、緊急な長崎警備の時には、本庄津・厘外津などから多くの藩士や軍事用の物資が運ばれたようです。幕末の佐賀にとって、佐賀城下の本庄津は、長崎警備とともに人と物が交流する重要に港だったのです。



「特定非営利活動法人 有明海ぐるりんネット」にこめた夢

特定非営利活動法人 有明海ぐるりんネット
理事長 荒牧　軍治

設立前夜

有明海のことを本気で考えるようになったのは，2001年元日に諫早干拓水門前で行われた海上デモの報道に接した時ですから，多くの方々とそんなに違いはありません。1996年（平成8年）に福博総合印刷から発刊されたFS（フクオカスタイル）Vol.16「特集　有明海大全」に「有明海研究所の創設を」の一文を寄せたことを「先見の明があったでしょう」と時々自慢げに鼻をピクつかせていますが，1997年4月293枚のギロチンで一気に諫早湾が締切られるテレビの映像を見て「すごい技術だ」と感心した程度ですから，本気で有明海環境問題を本気で考えていたとはとても言えません。それでも，異変直後に長崎大学が大学をあげて調査研究に乗り出したのを知り，学長に「佐賀大学も有明海研究に集中して取り組むべきだ」と進言し，言い出しっぺの責任で佐賀大学内に研究チームを立ち上げた所を見ると，有明海に対する感受性だけは失っていなかったと言えるかもしれません。でも，当時はどちらかというと西日本新聞川上弘文（三太郎）佐賀総局長（次の菊池総局長），佐賀県川上義幸土木部長の両川上氏らと取り組んでいた「佐賀を元気にする会」活動の方に気合いが入っていたのだと思います。

古川佐賀県知事が誕生し，川上氏が副知事になるに及んで有明海問題に正面切って取り組まざるを得なくなってきました。有明海研究所あるいはそれに変わる研究的な機関の設立を目指して走り回っていた川上副知事が，紆余曲折を経て研究者を中心とした組織「特定非営利活動法人有明海再生機構」を立ち上げるのに呼応した形で、私が有明海異変の解明と再生策の提示を目指す研究組織「有明海総合研究プロジェクト」を佐賀大学内に立ち上げて，調査研究及び行政対応の体制が確立しました。

『『有明海は宝の海』確かに素敵な奴には違いないけど、沿岸域の市民は本当に有明海を愛し、本気で付き合って居るんだろうか」有明海との関わりを深めるにつれ、我々の間で囁かれ続けていた台詞です。海での生産に携わる漁民、干拓工事、高潮対策の堤防工事に携わっている土木技術者と建設業者、有明海の環境、水産振興に関する地道な調査研究を継続している研究者、フェリーなどの海運に携わっている船員さん、そして有明海の豊かさ、素晴らしさを切り取って見せてくれるプロのカメラマン、芸術家たち、間違いなく有明海はそんなプロの海ではあります。しかし、「とても素人が近づけるような海ではないな」というのが率直な感想です。

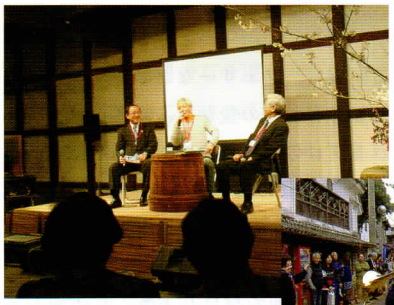
「有明海を食べよう、有明海を発見しよう、有明海を遊ぼう、有明海を楽しもう、有明海に感動しよう」我々自身が行動を起こし、そこで得た感動を口コミで、小冊子で、シンポジウムで、インターネットで少しずつ発信していく、そんな志で立ち上げたのが「特定非営利活動法人有明海ぐるりんネット」です。

シンポジウム

活動開始

2004年（平成16年）に東与賀町ふれあい館で「有明海ぐるりんネット設立準備シンポジウム」を開催し、設立趣旨を市民に呼びかけて会員勧誘を開始しました。勧誘を兼ねて桑原鹿島市長を表敬訪問したときのこと。私が有明海での最大の発明と思っている鹿島ガタリンピックの産みの

親に「有明海の活動を始めるなら、鹿島に学んでください」と貴重な忠告を戴きました。その忠告に素直に従って設立第１回目のシンポジウムは鹿島で毎年３月に開催されている「花と酒まつり」への押しかけシンポとなりました。シンポジウムで何をするかは勿論重要なのですが、我々にとっては人との出会いがもっと大事なこと。現地実行委員会と称して鹿島に出かけては、人との出会いを楽しんでいました。鹿島の人たちがひたすら酒好きであること、鹿島



シンポジウム

浜宿花酒祭り

に多くの酒造家が残っていること、そして今もなお麹（こうじ）屋さんが健在であることなど、酒にまつわるそんな出会いをとことん楽しむことができました。桑原市長の忠告に従って鹿島に学ぶと言うことは「酒と付き合うこと」だったと言ったら言い過ぎでしょうね。肥前浜町の酒蔵跡で開催した俳優の近藤正臣氏と我らが仲間川上三太郎氏との対談は、後世に残る名対談だったと思います。やっぱり最後まで酒にまつわるシンポジウムでした。

活動している中で素敵な３つの祭りに出会いました。１つは、何と言っても鹿島ガタリンピック。有明海の泥の海を祭りの舞台に仕上げた鹿島の人たちの想像力、創造力に脱帽です。会場には笑顔と笑い顔が弾けています。「鹿島の人たちとの付き合いがあるのなら、ガタリンピックの出場枠を確保してもらえませんか」との多くの人から依頼を受けましたが、「インターネットで参加申し込みを受け付けたら、何分かで満杯になった」と言っている実行委員に話す勇気はありません。そんな大人気

ガタリンピック

のガタリンピック会場に有明海ぐるりんネットのブースを用意してもらって、葦笛づくり、葦簀（よしず）づくりなどで会場の皆さんと遊んでいます。

ガタリンピックボランティア

祭りに感動

もう１つは、鹿島、白石地区で旧暦６月19日の夜に繰り広げられる「おしまさんまいり（沖の島参り）」。江戸末期に雨乞いの為に有明海に入水したお島さんの遺体が沖の島に流れ着いたことを哀れんで鉦浮立（かねふりゅう）を翌朝まで奉納する祭りです。我々は芦刈町で繰り広げられる「おしまさんまいり」に参加しました。住ノ江港から酒と料理を積み込んで出港します。夕暮れが深まるにつれ提灯を飾った漁船から笛と太鼓と鉦の音が聞こえてきます。単調で哀愁を帯びた鉦浮立が途切れることなく続きます。酒と料理と花火と囃子を朝の２時頃まで堪能したら一休みです。数艘の船を横に括ってゆっくりと沖に向かって流れていきます。先ほどまで大声を出していた若者たちも一休み、甲板で船を漕いでいます。６時過ぎ頃から船のエンジンが吼え始めると一目散に沖の島を目指します。沖の島に上陸した囃子手たちが狂ったように叩く太鼓の音と覆い被さるように響く笛の音が有明海に響き渡ります。引き潮から転じて満潮に向かうとき沖の島の横を流れる潮の速さに誰もが感動していました。「潮の流れの速さを体感できる仕掛けを作ろう」その時思いついた有明海ぐるりんネットの行動目標です。

大川市の風浪宮で旧暦４月１日に開催される「沖参り海神祭」は竜宮城説話が有明海から発祥したことを確信させる祭りです。風浪宮から遷座されたご神体を有明海に出現する干潟に祀（まつ）って祈る風景は、明らかに海神が住む竜宮城を想定したものです。干満差が６ｍ近くある有明海だからこそ思いつく説話なのです。

沖の島参り視察

出会うことの楽しさ

有明海ぐるりんネットを設立してほぼ4年、日常的な活動の中心は、毎月第1木曜日にサガテレビの会議室をお借りして開催している例会です。我が会員がこれまでの有明海との付き合いで蓄えてきた知識や知恵を聞きます。漁協の組合を退職した会員は、有明海の漁民に伝えられてきた気象に関する言い伝えを紹介してくれました。雲の動き風の動きでこれからの天気を読む技です。テレビの制作現場で働く会員は、親父さんの世代から自分に伝えられてきた有明海との付き合い方を披露してくれます。佐野記念館の館長さんには有明海の長い歴史の豊かさを教えていただきました。森の人々の豊かな食文化、佐賀空港を通って船小屋に繋ぐ新幹線構想、有明海農産物の売り込み作戦、大川・筑後川に伝わる昔話の魅力、神話における有明海の重要性、有明海からこの地に文化文明をもたらした徐福さん栄西さん、そんな話、こんな話を会員から会員外の方からたくさん聞いてきました。そんな魅力的な話を持っている人に出会うこと、それが最大の喜びあり、この会の目的そのものです。

ムツゴロウ

ノリ、ムツゴロウ、クチゾコ、ウミタケ、カキ、エビ、カニ、有明海のおいしさに何回も出会いました。「海苔は少し緑色になるくらいまで火で炙って」との忠告を守って食べる海苔のおいしいこと。舌にとろける有明海の恵みを3枚食べてもせいぜい１００円くらい。贅沢というのはこういう時に使うのだと思います。

おしまさんまいりに自分でムツかけをして捕ったムツゴロウの蒲焼きを持参して来られた会員さんがおられました。その美味しかったこと。今までムツゴロウの蒲焼きをそれ程美味しいと思って食べた記憶がなかったので、料理にはやはり技が必要なのだと納得しています。レシピを聞いて残しておくのも有明海ぐるりんネットの役目なのでしょう。

これからの夢

これまでの活動で、楽しいこと、美味しいもの、魅力的な人、美しい風景にたくさん出会いました。その一端は、この冊子「有明海」やシンポジウムで皆さんに伝えることができました。これからも、活動を継続し、多くの楽しいこと、魅力的な人に出会い続けます。この「有明海」は薄い冊子ですが、それでも10冊発刊し続ければ、我々の「有明海大全」が出来上がるはずです。

佐賀県有明海再生課やNPO法人有明海再生機構が開催されている有明海に関する講座や我々の活動で、少しずつ次世代の子供たちにも有明海の現状と魅力が伝わりつつあります。多くの子供たちが「有明海は郷土の誇り」と感じてくれるようになった時、本当の有明海再生が始まるのだと言い聞かせながら活動を続けていくことにします。

そして、どうしても実現したい夢があります。海岸から沖合のカキ礁に向かって1km程の木橋を作りたいのです。大潮の満潮時、木橋の周りは海水で満ちています。海に向かって歩き始めると、潮が引き初め、干潟が顔を出し始めます。陽気の好い日だったら、ムツゴロウやトビハゼやシオマネキが出てきてくれるはずです。干潟の広がりと一緒に歩を進めると、その先端はカキ礁です。佐賀の干潟は泥干潟なので潟スキーを使わないと動き回ることはできませんが、カキ礁の上なら歩き回れます。モコモコっと盛り上がったカキ礁に出会えれば、カキたちが元気な証拠。カキ礁には小さな生き物たちが一杯居るはず、じっくりと観察しましょう。潮が満ち始めたら木橋へ撤退です。潮が満ち始めるとシャカシャカと小さな音がします。水の先端が干潟に当たって小さな音を立てているのです。満ちてくる水の先端に小さな鳥たちが横一列に並んで浮いていたら、潮と一緒に上がってくる小魚たちを狙っているのです。有明海の不思議さを十分に感じたら、有明海の中の水路「澪筋（みおすじ）」を流れる潮の速さを感じながら遙か向こうに見える背振山系に向かって帰路を急ぎましょう。

佐賀県漁協の組合長さんに夢を語ったら「私個人は大賛成です」との言葉を戴きました。夢は語り続け、活動し続けてこそ実現するもの。夢で終わらせないように作戦を練ることにします。

＼有明海ぐるりん検定2009／

3月15日(日)に佐賀大学で開催した「ぐるケン」には福岡、佐賀、熊本の3県から37名もの受験者に参加していただきました。

最高齢者は 70才、最年少は 12才の少年でした。受付をしている少年の顔が、一寸だけ緊張しているのが印象に残りました。

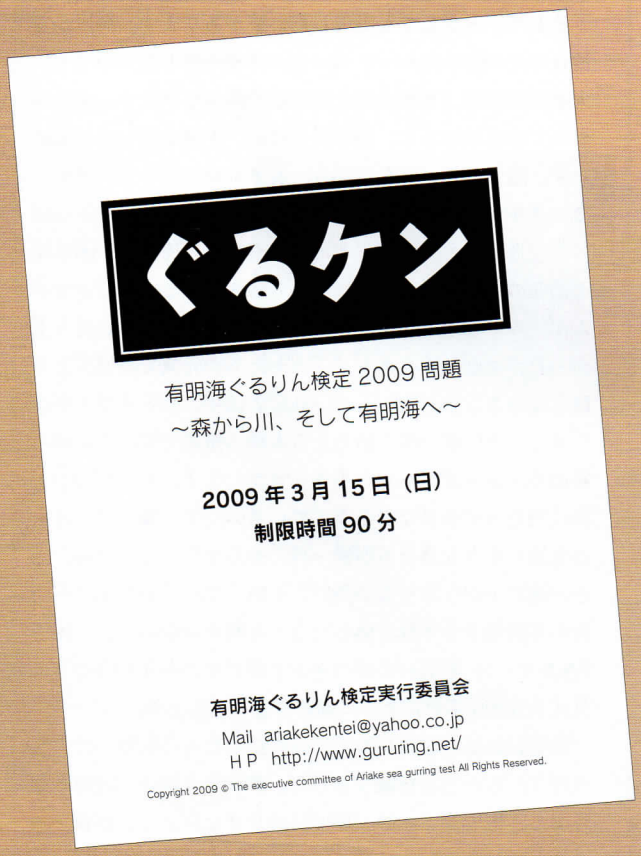
有明海ぐるりん検定 2009(愛称: ぐるケン) は有明海と有明海沿岸域の魅力を「知ること」は有明海を「楽しむことの入り口」を合い言葉に企画しました。

開始までは、問題を再確認している方、瞑想にふけっている方、仲間と談笑している方と、大学入試とは一寸違う穏やかな雰囲気が漂っていましたが、さすがに試験開始になると入学試験の時と同じ緊張感が走って、紙のすれる音と鉛筆の動く音だけになりました。

開始から 10分程度で問題を解き終わった方もおられ、退室可能の時刻には、多くの方が退室しました。試験結果に満足されたのでしょう、一様に笑顔があふれています。参加賞のノリと冊子有明海 3号を手にした受験者の方から、「楽しい企画を有り難うございました」との感謝の言葉を戴きました。企画者冥利に尽きる言葉です。

多くの方がみっちりと予習されてきたみたいで、採点をしてみると合格点と設定した 60点を割る方はほとんど無く、ほぼ全員合格という結果でした。しかも、100点満点の方が 9名、90点台が 21名と受験者の 8割を超す方が大学の成績で言う「秀」の成績を取るという結果でした。皆さんとても優秀でした。教師は優秀な学生によって育てられます。来年度以降も、優秀な受験者の皆さんに負けないような良問を作成して、一段とレベルの高い、そして楽しい有明海ぐるりん検定を企画することにします。

なお、問題と解答は私達のＮＰＯのホームページからみることができます。



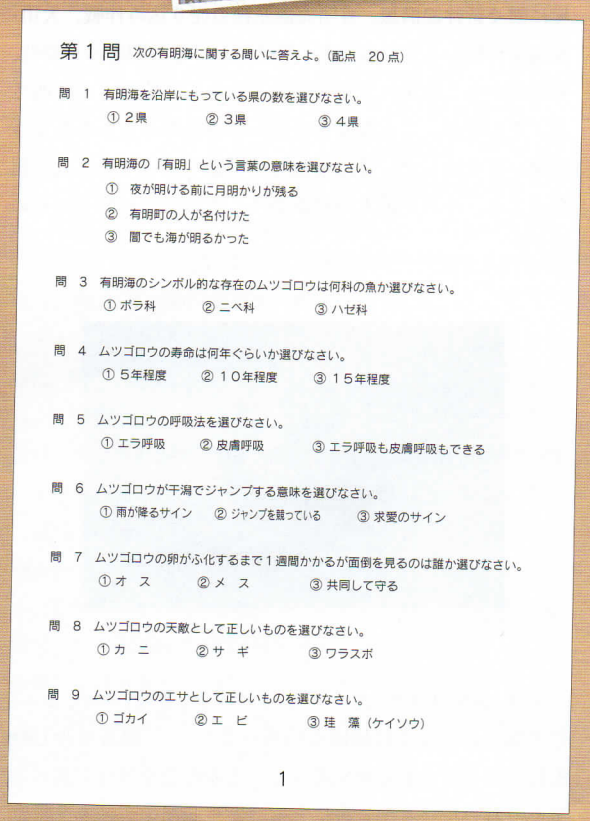
ぐるケン

有明海ぐるりん検定 2009 問題
～森から川、そして有明海へ～

2009 年 3 月 15 日（日）
制限時間 90 分

有明海ぐるりん検定実行委員会
Mail ariakekentei@yahoo.co.jp
ＨＰ http://www.gururing.net/

Copyright 2009 © The executive committee of Ariake sea gurring test All Rights Reserved.



第１問　次の有明海に関する問いに答えよ。(配点　20 点)

問　1　有明海を沿岸にもっている県の数を選びなさい。
① 2県　② 3県　③ 4県

問　2　有明海の「有明」という言葉の意味を選びなさい。
① 夜が明ける前に月明かりが残る
② 有明町の人が名付けた
③ 闇でも海が明るかった

問　3　有明海のシンボル的な存在のムツゴロウは何科の魚か選びなさい。
① ボラ科　② ニベ科　③ ハゼ科

問　4　ムツゴロウの寿命は何年ぐらいか選びなさい。
① 5年程度　② 10年程度　③ 15年程度

問　5　ムツゴロウの呼吸法を選びなさい。
① エラ呼吸　② 皮膚呼吸　③ エラ呼吸も皮膚呼吸もできる

問　6　ムツゴロウが干潟でジャンプする意味を選びなさい。
① 雨が降るサイン　② ジャンプを競っている　③ 求愛のサイン

問　7　ムツゴロウの卵がふ化するまで１週間かかるが面倒を見るのは誰か選びなさい。
① オ　ス　② メ　ス　③ 共同して守る

問　8　ムツゴロウの天敵として正しいものを選びなさい。
① カ　ニ　② サ　ギ　③ ワラスボ

問　9　ムツゴロウのエサとして正しいものを選びなさい。
① ゴカイ　② エ　ビ　③ 珪　藻（ケイソウ）

1

問　10　竹崎ガニで有名なガザミは、何科か選びなさい。
① マガニ科　② ワタリガニ科　③ スナガニ科

問　11　シオマネキがはさみを振る行動の意味で正しいものを選びなさい。
① 求愛のため　② 日除けのため　③ 潮を招いているため

問　12　シオマネキが巣穴を掘る場所で正しいものを選びなさい。
①ムツゴロウの巣穴の近く
②潮が来ない地盤の高いところ
③巣穴は造らない

問　13　カササギで卵を温め、子育てをするのは誰か選びなさい。
①オ　ス　②メ　ス　③オスとメスどちらも

問　14　シチメンソウは、何科の植物か選びなさい。
①アカネ科　②イグサ科　③アカザ科

問　15　ノリを現在の紙のように漉き始めたのはいつ頃か選びなさい。
①平安時代　②鎌倉時代　③江戸時代

問　16　ノリは種があります。その種が夏場を過ごしている場所として正しいものを選びなさい。
① 干潟の泥の中
② 岩場などの小さな隙間
③ 蛎（カキ）などの貝殻の中

問　17　日本で一年間に生産されるノリの枚数を選びなさい。
①２０億枚　②５０億枚　③１００億枚

問　18　日本でノリを一番生産している県を選びなさい。
①福岡県　②佐賀県　③兵庫県

問　19　有明海はノリの特産地ですが、栽培されている品種はどれか選びなさい。
①アサクサノリ　②スサビノリ　③ヤキノリ

問　20　一番摘みの初物のうち厳選されたノリを「佐賀海苔有明海一番」として認定していますが評価基準として間違っているものを選びなさい。
①うま味のもととなるタンパク質含有量が「50%以上（乾海苔）」の ものであること
②ひと網 300 枚以内の厳選摘みであること
③口どけが、食感測定値「100 回以内（焼き海苔）」のやわらかさで、おいしいものであること

第２問　次の有明海に関する問いに答えよ。（配点　20 点）

問　1　有明海の干潟の泥は、ある山の火山灰が蓄積してできたと考えられています。その山を選びなさい。
①雲仙普賢岳　②多良岳　③阿蘇山

問　2　有明海の干潟は、全国の干潟の約何%を占めているか選びなさい。
①約２０%　②約４０%　③約６０%

問　3　有明海の干潟は場所によって細かい泥が厚く堆積している場所と砂と泥が適度に混じり合った砂泥質の場所があります。次の組み合わせで正しいものを選びなさい。
① 佐賀県鹿島沖－砂泥質
② 福岡県荒尾沖－砂泥質
③ 熊本県熊本沖－泥質

問　4　イワシ類同様に小骨が多いコノシロは何科の魚か選びなさい。
① ニシン科　② ハ　ゼ科　③ スズキ科

問　5　5月～8月ごろ筑後川などで産卵をするエツは何科の魚か選びなさい。
① ニシン科　② カタクチイワシ科　③ スズキ科

問　6　ワラスボは、潟で住むため退化したものを選びなさい。
① 口　② 目　③ 頭

問　7　ワラスボを乾燥し、細かく粉にしたものを何というか選びなさい。
① もぐさ　② ふりかけ　③ もくさい

問　8　有明海で見られるナルトビエイの特徴として間違っているものを選びなさい。
① ショベルのような下あごで海底のアサリを食べる
② 長い尾の付け根にある尾棘には毒がある
③ 亜寒帯から寒帯の海に生息する

問 9　有明海に生息するナルトビエイから抽出した物質で効果があるかもしれないといわれるものを選びなさい。
①メタボリック症候群を改善できる
②がん細胞を減少させる
③アルツハイマー病を改善できる

問 10 有明海に生息しているスナメリと同じ仲間の動物を選びなさい。
① オットセイ　② クジラ　③ アシカ

問 11 シャコ（通称：穴シャコ）の巣孔の形で正しいものを選びなさい。
① L字型　② H字型　③ U字型

問 12 イシワケイソギンチャク（ワケノシンノス）の好物を選びなさい。
① アサリの稚貝　② プランクトン　③ 小魚

問 13 サルボウの肋（あばら）数を選びなさい。
① ２０本程度　② ３０本程度　③ ４０本程度

問 14 タイラギは、何科の貝か選びなさい。
① アクキガイ科　② フネガイ科　③ ウグイスガイ科

問 15 アゲマキガイの巣穴の深さは体長の何倍ぐらいか、選びなさい。
① ５倍程度　② ８倍程　③ １０倍程度

問 16 アゲマキガイの特徴として正しいものを選びなさい。
①日光に当たる時間が短いほど成長する
②海水に浸かっている時間が長いほど成長する
③気温が低いほど成長する

問 17 ウミタケは何科の貝か選びなさい。
① 二枚貝の一種　② 海ぶどうの一種　③ 椎茸の一種

問 18　ウミタケ（海茸）を捕る道具として正しいものを選びなさい。
① 網ですくう　② 釣り上げる　③ ねじ棒で取る

問 19　ミドリシャミセンガイが先祖と考えられているものを選びなさい。
① イ　カ　② タ　コ　③ クラゲ

問 20　シチメンソウの名前の由来で正しいものを選びなさい。
①七色の虹のように色が変わるから
②七面鳥のように色が変化するから
③七変化という意味

第３問　次の有明海に関する問いに答えよ。（配点　20 点）

問 1　有明海の満潮時の海岸線と干潮時の水際までの距離を測りました。最も長いところはどのくらいあるか選びなさい。
① 富士山（３７７６ｍ）の標高より長い
② 富士山の標高より短い
③ 富士山の標高とほぼ同じ

問 2　有明海の海水の量を、海面の広さ（面積）で割ったとき、平均水深はどれくらいになるか選びなさい。
① 20m　② 28m　③ 47m

問 3　有明海は日本で干潮と満潮の差が大きい海として有名です。この大きな干満の差が起こる原因と同じ原因の事象を選びなさい。
① 水が吸い込まれるときに渦を巻く
② 調子を上手にとってブランコを大きく揺らす
③ 飛行機が浮き上がる

問 4　潮の満ち引きに関係の無い力を選びなさい。
① 月と地球の間に働く引力
② 地球と他の惑星との間の引力
③　月と地球の重心の回りに回転する時の遠心力

問 5　アリアケヒメシラウオが生息している場所として正しいものを選びなさい。
① 有明海だけ　② 八代海にもいる　③ 東シナ海にもいる

問 6　有明海とその流入河川に生息するヤマノカミは、何科の魚か選びなさい。
① カジカ科　② ハ　ゼ科　③ ボ　ラ科

問 7　目と口の周辺が赤いアカメやメナダと呼ばれる魚は何科か選びなさい。
①　ボ　ラ科　② ニ　ベ科　③ スズキ科

問 8　鹿島市が登録している組織の名称を選びなさい。
① アジア地区地域シギチドリ類重要生息地ネットワーク
② 東アジア・オーストラリア地域シギチドリ類重要生息地ネットワーク
③ 太平洋地域シギチドリ類重要生息地ネットワーク

問 9　鳥類の分類方法でシギ・チドリが属しているものを選びなさい。
① 猛禽類　② 原禽類　③ 渉禽類

問 10　チドリ類の特徴として間違っているものを選びなさい。
① 後趾が発達して第一趾（親指にあたる）が退化している
② 嘴が長い
③ 眼が大型

問 11　有明海の野鳥のアオサギの記述として間違っているものを選びなさい。
① 飛んでいる時には首を伸ばして飛ぶ
② 木の枝をつかって樹の上に巣を作って、集団で繁殖をする
③ 繁殖する時になると顔、くちばし、足の裸出部に赤みを帯びる婚姻色があらわれる

問 12　有明海の野鳥のハヤブサの記述として間違っているものを選びなさい。
① 小型や中型の鳥類を空中で蹴落として失神させる
② 旋回や方向転換も素早くできる
③ 飛翔時の最高速度は時速 200km に達する

問 13　有明海の野鳥のダイシャクシギの記述として間違っているものを選びなさい。
① 長いくちばしがまっすぐ伸びている
② 繁殖期になると縄張りをもつようになる
③ 日本で観察できるシギ類の中で最大のもの

問 14　渡り鳥を媒介して世界中にトリインフルエンザのような病原菌が爆発的に広まることを表す言葉を選びなさい。
① パンデミック　② パスタデミック　③ ライスデミック

問 15　棚じぶというやぐらを組み、網を入れて魚を取る「四手網」の記述で正しいものを選びなさい。
① 有明海が満ち潮の時に網をいれる
② 有明海が満ち潮・引き潮の時に網をいれる
③ 有明海の引き潮の時に網をいれる

問 16　最も大きな漁法といわれる「竹羽瀬漁」の記述として正しいものを選びなさい。
① 沖合の漁場での巻き網漁
② 竹に取り付けた流し網漁
③ 多くの竹をＶ字やＷ字の形に並べ袋網に追い込む漁

問 17　殻が柔らかい穴ジャコを捕獲する方法を選びなさい。
① 網ですくう　② 和筆を穴に入れてとる　③ 穴に塩を入れる

問 18　佐賀市大和町の興止日女（よどひめ）神社の近くの人はある魚を食べないと言われています。その魚を選びなさい。
① 鯉　② なまず　③ フ　ナ

問 19　有明海での言い伝えで、河口などにウミタケが多く生息するとどうなるか、選びなさい。
① 水害や台風が多い　② 水害や台風が少ない　③ 晴天続きになる

問 20　シャコ（しゃっぱ）が旨いという時期を選びなさい。
① 麦穂が出る頃　② 稲刈りの頃　③ 初雪が舞う頃

第４問　次の有明海ぐるりんエリアに関する問いに答えよ。（配点　20 点）

問 1　嘉瀬川や城原川のように、周囲の地盤より高いところを水が流れる川の名称を選びなさい。
① 天井川　② 蛇行川　③ 江湖（えご）

問 2　筑後川の河口部には延長約 6.5km のデ・レーケ導流堤があります。この堤が作られた理由を選びなさい。
① 水害対策　② 航路の確保　③ 塩水と真水の混ざらないようにするため

問 3　佐賀藩の老中であった成富兵庫茂安が筑後川右岸に築造した堤防の名称を選びなさい。
① 安武堤防　② 千栗（ちりく）堤　③ 茂安堤

問 4　筑後川下流部の大野島と大詫間がある地形を選びなさい。
① 後背湿地　② 三角洲　③ 輪　中

問 5　冬から春にかけて佐賀平野で栽培されている日本で一番生産量の多い大麦を選びなさい。
① 二条大麦　② 四条大麦　③ 六条大麦

問 6　冬から春にかけて佐賀平野・白石平野で栽培されている日本で生産量第二位の野菜を選びなさい。
① イチゴ　② アスパラガス　③ タマネギ

問 7　平成 19 年現在、佐賀県で一番多く栽培されているイチゴの品種の名称を選びなさい。
① さがほのか　② あまおう　③ とよのか

問 8　有明海沿岸の佐賀には、水路が多くありますがすべての長さをあわせるとどれぐらいになるか選びなさい。
① 約千ｋｍ　② 約二千ｋｍ　③ 約三千ｋｍ

問 9　有明海沿岸に広く分布する水路ができた理由の記述として正しいものを選びなさい。
① 洪水であふれてできた　② 人が掘ってできた　③ 干潟にできる水のみち

問 10　佐賀県でＡ竹林、Ｂ自然林、Ｃ人工林を面積の広い順に並んでいるものを選びなさい。
① Ａ→Ｂ→Ｃ　② Ｂ→Ａ→Ｃ　③ Ｃ→Ｂ→Ａ

問 11　森林が海に及ぼす影響として関係のないものを選びなさい。
① 森林土壌中の栄養分が川から海へ流れ込み、魚や貝を育てる
② 森林が土砂の流出をおさえ、きれいな水を流す
③ 森林が水をたくわえるので海水の塩分濃度が上がる

問 12　しいたけを栽培する際に用いる原木として適さないものを選びなさい。
① ス　ギ　② コナラ　③ クヌギ

問 13　佐賀平野に道路を作る時、問題になることを選びなさい。
① 道路の地盤が軟らかくて道路がへこむおそれがあること
② 農地が多いので道路を作る土地が少ない
③ 土地が平らなので道路の景色が単調になってしまう

問 14　吉野ヶ里町にある「吉野ヶ里歴史公園」の特徴として間違っているものを選びなさい。
① 縄文時代の環濠集落跡
② 食料を保管する高床式倉庫の跡なども発掘
③ 2 つの墳丘墓がある

問 15　龍造寺家と鍋島家の菩提寺として有名な高伝寺（佐賀市）ですが、敷地一面に植わっている植物が有名です。それを選びなさい。
① サクラ　② ウ　メ　③ モ　モ

問 16　白石町の郷土料理として伝わっている須古寿しですが、特徴として間違っているものを選びなさい。
① 味がたんぱくで厚みが 1 センチぐらい
② お祭りやお祝い事に作る
③ アサリの甘露煮を必ずいれる

問 17　11 月に開催される熱気球の祭「佐賀インターナショナルバルーンフェスタ」はどこの河川敷をメイン会場にしているか選びなさい。
① 嘉瀬川　② 六角川　③ 筑後川

問 18　佐賀の七賢人佐野常民の記述で関係のないものを選びなさい。
① 日本赤十字社の創始者
② 横浜海軍伝習所の開設に尽力
③ 万博男と言われるように日本の近代化に尽力

問 19　筑後川の夏の風物詩「エツ」を調理する時に行うことを選びなさい。
① たすき落とし　② 骨切り　③ 隠し腹

問 20　佐賀市東与賀町の海岸には、二つの記念碑があります。組み合わせが正しいものを選びなさい。
① 明治天皇と大正天皇　② 大正天皇と昭和天皇　③ 昭和天皇と平成天皇

第５問　次の有明海ぐるりんエリアに関する問いに答えよ。（配点　20 点）

問 1　有明海に河口をもつ一級河川は何本あるか選びなさい。
① ６本　② ８本　③ １２本

問 2　筑後川の水が福岡都市圏（福岡市とその周辺住民 200 万人）の水の何%をまかなっているか選びなさい。
① １０%　② ２０%　③ ３０%

問 3　混声合唱組曲「筑後川」を作曲した作曲家を選びなさい。
① 山田耕筰　② 團伊玖磨　③ 中田喜直

問 4　筑後川流域の渡しで最後まであった場所を選びなさい。
① 宮ノ陣の渡し（福岡県久留米市）
② 下田の渡し（福岡県久留米市）
③ 若津港の渡し（福岡県大川市）

問 5　筑後川にかかっている長門石橋、天建寺橋、諸富橋で右岸と左岸の行政区が異なるものを選びなさい。
① 長門石橋　② 天建寺橋　③ 諸富橋

問 6　筑後川で生息するエツを捕るための漁法を選びなさい。
① まき網　② さし網　③ そこびき網

問 7　六角川で満潮になろうとするとき，上流に向かって海水が流れます。どれくらいの速さで流れるか選びなさい。
① 人の歩く速さの半分　② 人の歩く速さ　③ 自転車で走る速さ

問 8　筑後川中流域の支流、黄金川でしか天然モノがとれなくなった川茸（かわたけ）の学名で正しいものを選びなさい。
① アオノリ　② コウテンジノリ　③ スイゼンジノリ

問 9　中国から現在の背振山（佐賀県神埼市）にお茶を伝えたとされる人物を選びなさい。
① 栄　西　　② 空　海　　③ 最　澄

問 10　神埼市千代田町で栽培されているヒシの実を採集する際に用いる桶の名前を選びなさい。
① ハンギー　　② ヒンギー　　③ ホンキー

問 11　一般的にタマネギと呼んでいる部分は植物のどの部位にあたるか選びなさい。
① 根　　② 茎　　③ 葉

問 12　佐賀や白石平野の風物詩として麦秋があります。これを季語として俳句や短歌に使用する場合、あらわす季節はいつか選びなさい。
① 春　　② 夏　　③ 秋

問 13　10 アール（1000 ㎡）当り 500ｋｇの収穫がある田んぼでは、ご飯茶碗 1 杯のお米を作るのにどれぐらいの水を使うか選びなさい。
① ペットボトル（1 リットル）80 本
② バケツ（10 リットル）10 杯
③ ドラム缶（200 リットル）1 本

問 14　佐賀における水路の掃除の名前を選びなさい。
① ヒシクイ　　② チリトリ　　③ ゴミクイ

問 15　水路の水草を巣として上手に水にもぐる鳥を佐賀での呼び名を選びなさい。
① カチガラス　　② キャーツグロ　　③ ゴイサギ

問 16　森林に日光があたるようにして、太くて丈夫な木を育てるために必要な作業を選びなさい。
① 除　伐　　② 主　伐　　③ 間　伐

問 17　獣肉を食べることが禁止された時代、イノシシだけをある名前で呼んで食べていました。その名前を選びなさい。
① やまあしか　　② やまくじら　　③ やまいるか

問 18　飛行機が離着陸をする際に、野鳥と衝突してしまうことをバードストライクと言います。佐賀空港で発生した 2007 年のバードストライク数を選びなさい。
① 11 件　　② 51 件　　③ 101 件

問 19　みやき町の綾部八幡神社は毎年 7 月 15 日に秋の天候を占うために旗上げ神事を行います。ここに祭られている神様を選びなさい。
① 風の神　　② 山の神　　③ 水の神

問 20　佐賀の七賢人江藤新平の記述で関係のないものを選びなさい。
① 初代司法卿（法務大臣）に就任して四民平等や警察制度を整備
② 東京奠都（とうきょうてんと）を推進した
③ 西南戦争に加わり政府軍と戦った

ぐるケン　有明海ぐるりん検定 2009 ～森から川、そして有明海へ～
2009 年 3 月 15 日（日）制限時間 90 分

受験番号	09XXX	氏　名	有明ぐるりん

第1問

問 1	問 2	問 3	問 4	問 5	問 6	問 7	問 8	問 9	問 10
③	①	③	①	③	③	①	②	③	②
問 11	問 12	問 13	問 14	問 15	問 16	問 17	問 18	問 19	問 20
①	②	③	③	③	③	③	②	②	③

第2問

問 1	問 2	問 3	問 4	問 5	問 6	問 7	問 8	問 9	問 10
③	②	②	①	②	②	③	③	①	②
問 11	問 12	問 13	問 14	問 15	問 16	問 17	問 18	問 19	問 20
③	①	②	③	②	②	①	③	①	②

第3問

問 1	問 2	問 3	問 4	問 5	問 6	問 7	問 8	問 9	問 10
①	①	②	②	①	①	①	②	③	②
問 11	問 12	問 13	問 14	問 15	問 16	問 17	問 18	問 19	問 20
①	②	①	①	②	③	②	②	①	①

第4問

問 1	問 2	問 3	問 4	問 5	問 6	問 7	問 8	問 9	問 10
①	②	②	②	①	③	①	③	③	③
問 11	問 12	問 13	問 14	問 15	問 16	問 17	問 18	問 19	問 20
③	①	①	①	②	③	①	②	②	③

第5問

問 1	問 2	問 3	問 4	問 5	問 6	問 7	問 8	問 9	問 10
②	③	②	②	②	②	②	③	①	①
問 11	問 12	問 13	問 14	問 15	問 16	問 17	問 18	問 19	問 20
③	②	③	③	②	③	②	②	①	③

解答
あなたは何問解りましたか?

2008年の有明海

有明海の1年を追ってみました

佐賀県 有明海再生・自然環境課 川村 嘉応

◎初春の有明海

有明海の初春景色といえば、やはり海一面に広がっているノリ養殖の景観でしょう。海苔は毎年、赤かったシチメンソウが枯れてしまう11月から翌年の4月までおよそ6ヶ月間、網についた海苔を刈り取って収穫されます。加工直後は海苔の色は真っ黒で、皆さんのお口にはいる時は焼いてあるので緑色です。ところが、黄色の海苔というのもあって、海水中に栄養塩（栄養分）がなくなるとそのような色になってしまいます。これは見た目も悪く、味もなく、売り物にならないので皆さんのお口には入ることはないでしょう。

今の海苔養殖の豊凶は、この栄養塩の量で決まります。栄養塩がたくさんあるためには、川の水が海へちょうどよいくらい流れてくること、栄養塩を食べる植物プランクトンが少ないことが条件です。そのためには、曇り、雨模様の天気が多い方がよいことになります。そういう気候が続いていますので、近年は豊作が続いているのでしょう。

いっぽう、プランクトンの生存量にはプランクトンを食べてくれる貝類（カキ、アサリ、モガイ等）の存在が大きく影響します。

◎初夏のカキ礁

昨年、6月3日に漁業者の皆さんと、10月13日には一般の方々と一緒にカキ礁を見に行きました。私が知っているカキ礁は、20年くらい前、カキ礁の上を歩くと痛いくらいの大きな天然カキが盛り上がっていました。ところがどうでしょう。今回行ったところはいずれも悠々と歩くことができるくらい生きたカキがいないのです。どうしてでしょうか。理由が分かりません。調査研究が必要です。さて、カキ礁には、多くの役割があるとされています。例えば、カキ礁には、海を浄化する役割があることです。カキ礁があるとプランクトンを食べてくれますし、カキ礁が流れを引き起こしてくれます。生物がたくさん集まっても来ます。

有明海再生のために、このような役割をもつカキ礁を増やしてはいかがでしょう。

◎早い梅雨明けで始まった夏

梅雨明けは平年より12日も早い7月6日。そのため7月の平均気温は、28．9℃。平年よりも2．2℃高く、観測史上4番目に高い気温でした。それに対し雨は少なく、44．5mm（平年比13％）でした。このような気候の中で、毎年発生する赤潮、貧酸素水塊（酸素が少ない水の塊）はひどく、魚介類のへい死も見られました。

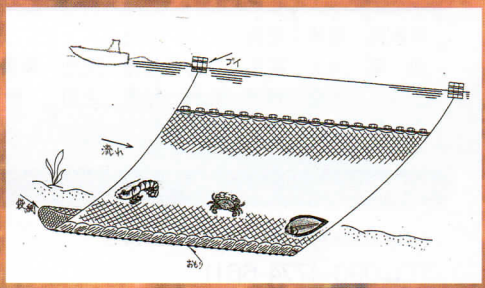
◎初秋の贈り物

赤潮被害が終わった初秋（9月上旬）、たくさんの竹崎ガニ（ガザミ）が捕れました。多い日には1日40～80kgと普段の2～4倍捕れたそうです。さらに、11月のはじめから年明けにかけて、たくさんのシバエビが捕れました。こちらは、遠くは天草から、佐賀県海域にまで漁にやって来て、投網で1日に700～1500kg捕れ、売値が下がるほどの大量だったようです。どうしてでしょうか。よく分かりません。時として自然は予期せぬ贈り物をするのです。

シバエビ

◎人と生物との共同

最後に、人と生物との共同についてのお話です。クルマエビやクチゾコなどを漁獲する時には、錘のついた網を流し海底にいる魚を捕る源式（げんしき）網を使いますので、海底の泥を耕すことにつながります。漁業によって海底の状態を改善します。同じようにアサリ、モガイなどの貝類を捕ることによって海底を耕すことになります。農業者の皆さんが田畑を耕すように、海泥に酸素が入り海底の状態がよくなります。海でも同じです。生物が増えれば、漁業者が耕し、環境が良くなり生物も増えます。そうなると次の世代の生物もますます増えて、漁獲量が増える正の連鎖方向に向かっていきます。海に生物が少なければ、人工的に生物を増やしてあげる（放流する）こと



げんしき網

— 自然への贈り物 —も
ひとつのきっかけとして必要なのでしょう。

Contents

特集1　有明海の魅力について…… 2～5

特集2　有明海 昔語り…… 6～10

「特定非営利活動法人
　有明海ぐるりんネット」にこめた夢 …11～13

有明海ぐるりん検定2009 “ぐるケン”…… 14

2008年の有明海……19

●NPO法人有明海ぐるりんネット

有明海を楽しむ。有明海を知る。
有明海を届ける。

活動は

●定例会　毎月第一木曜日18：00～19：30
佐賀市城内サガテレビ大会議室
有明海に関係する講座とその後は懇親会

組織は

理事長　荒牧　軍治
理　事　川上　義幸　河野眞佐徳　菊池　恵美
　　北島　悦子　北村　和秀　原田　彰
会　員　30名

入会は

〒849-0203 佐賀市久保田町新田3714-5
TEL 090-4774-6611
E-mail aramakig@cc.saga-u.ac.jp

●発行／NPO法人有明海ぐるりんネット

有明海

Ariake Kai
2009

Vol.4